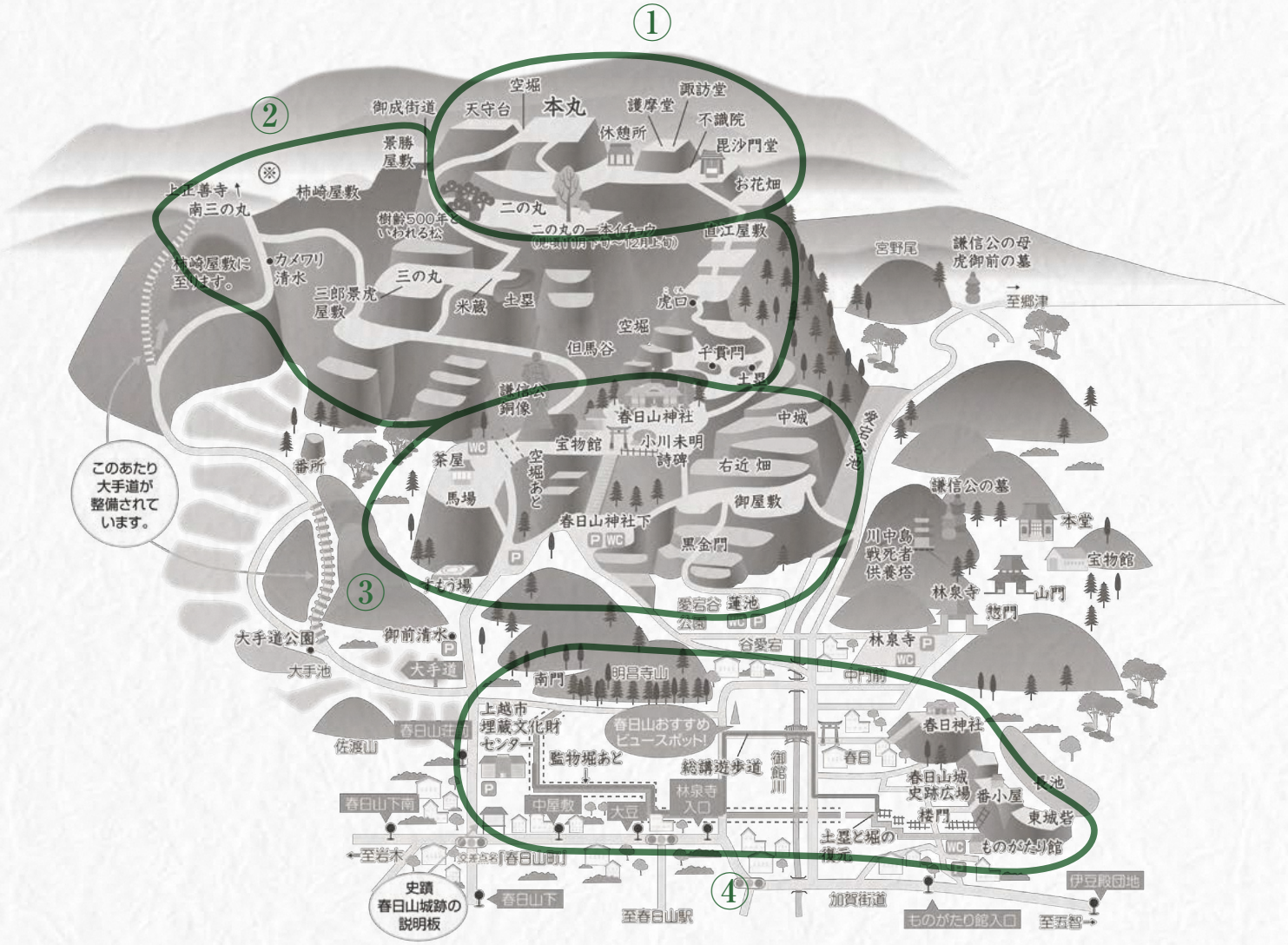
中世山城の白眉（はくび）　春日山城

◆「土の城」

戦国時代の名将、上杉謙信公の居城として知られる春日山城には、全国から多くの人が訪れています。

戦国時代の山城である春日山城は、一般的にイメージされる白亜の天守閣を持つ城ではなく、石垣さえも存在しません。その本来の姿は、地形を巧みに利用して曲輪や空堀、土塁を造りあげたもので、その土木工事の粋、言い換えれば軍事施設として敵の侵入を防ぐ機能美が春日山城の魅力です。「城」という字が土偏に成るの如く、春日山城はまさに「土の城」なのです。

◆城の変遷

春日山城の成立については、諸説あってよくわかっていません。現在見るような広大な山城としての整備は、越後守護代長尾為景、上杉謙信公、景勝の親子三代と上杉家に替わって入城した堀家によるものと考えられています。その拡大過程について、春日山を長くフィールドとする研究者は、①本丸周辺、②南三の丸と通称される本丸の南に広がる平坦な一群及び三の丸から千貫門に広がる曲輪群、③御屋敷遺構群、そして④総構が築かれた山裾の平坦地の大きく4つのグループに分け、①から④に段階的に拡大していった、と推測されています。春日山城の特徴は、山頂の本丸跡から総構まで、すなわち①から④までの遺構が間断なく連続していることにあり、山城としては稀有な例といえるでしょう。

慶長12（1607）年、堀家が直江津に築いた福島城に移り、中世越後統治の象徴であった春日山城は廃城となりました。